

平成30年度 下野市中学生平和研修派遣事業 報告書



広島県広島市

平成30年8月5日(日)～8月7日(火)



下野市

市長あいさつ



下野市長 広瀬寿雄

栃木県原爆被害者協議会が5月に解散いたしました。会員の高齢化が進み、語り部活動の継続が難しくなったためということです。これまで全国で3県の原爆被害者協議会が解散しており、東日本では栃木県が初とのことでした。

戦争を知る世代は高齢化とともに年々減少し、私たちが直に戦争の実体験を聞くことはさらに困難になっていくと思われます。これからは、語り継がれた戦争の記憶を、私たちが次の世代にどう伝えていくか、それが私たちに託された大きな課題となります。

このような中で、市の中学生を広島へ派遣することの意義は決して小さなものではありません。

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成18年6月16日に「非核平和都市宣言」を行いました。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として、市内4中学校から生徒を広島に派遣するもので、今年で5回目の派遣となりました。

派遣団の生徒たちは各学校の、そして下野市の代表として平和記念式典へ参列し、各学校の生徒が折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。

また、広島平和記念資料館、原爆ドームなどの見学、被爆体験講話の聴講、灯ろう流し体験を通じ、戦争の悲惨さや平和への願いを、目と耳と心で感じる事ができたことと思っています。

さらに、今回初めて「壁に残された伝言」のある袋町小学校平和資料館へ見学に行きました。こちらは2年生の国語の教科書でも紹介されており、学校での授業と合わせて理解を深めてもらえたことと思います。

今後は各中学校の文化祭において、広島で感じたこと、学んできたことを学校の生徒たちに伝え、共有するとともに、さらに次の世代へ伝えていってもらえるものと期待しています。

最後に本事業にご参加いただきました生徒及びその保護者の方々、また、事業実施に向けてご協力いただきました多くの方々に心から御礼申し上げます。

ヒロシマを知ることは未来を考えること

下野市中学生平和研修派遣団団長 阿嶋 敬一

「非核平和都市宣言推進事業及び平和学習活動の一環として、広島平和記念式典への参列や原爆ドーム・平和記念資料館等の見学などを体験することにより、次代を担う若い世代に核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、生命の尊厳について学び、将来に繋げる生徒を育成すること」を目的に、8月5日（日）から7日（火）の3日間、下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長として広島での研修に生徒と共に参加してきました。今回は下野市4校の8名と壬生町2校の4名の中学2年生12名、教諭2名、それぞれ市町の事務局の職員2名、添乗員1名の合計18名の派遣団でした。

5日の早朝、保護者の皆様をはじめたくさんの関係者の見送りの出発式の後、自治医大駅を出発、そして緊張と不安と期待が入り交じった心で広島駅に到着、晴天の猛暑の中、路面電車を乗り継いでホテルにチェックイン、その後平和記念公園に向かいました。最初に目に飛び込んできたのは世界文化遺産の「原爆ドーム」、当時の吹き抜けのレンガ造りの建物「広島県産業奨励館」は、ほぼ爆心地で被爆し大破しながらも全壊を免れました。被爆による後遺症で亡くなった、椿山ヒロ子さんの日記をきっかけに、被爆体験を伝える貴重な建物として当時の姿を残したまま保存されることになったのが「原爆ドーム」です。原爆の威力や悲惨さを今に伝えながら、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を訴えかけています。「原爆ドーム」の前に立ち、映像や写真とは異なる本物の重みと痛みを身体全体で感じることができました。次は被爆者の体験講話会、出発前の事前研修会でも下野市在住の被爆者の方から講話をいただき、「原爆被害の実相」について学び感じることはできましたが、現地での講話は更に一人一人の生徒の心に響き、特に私は「原爆被害の特質」として大量破壊、大量殺戮が瞬時に無差別に引き起こされたと同時に、放射線による障害がその後も長年にわたり人々を苦しめていること、それらのことが現在の世界の核兵器の現状や原発の現状、福島県の今についても無関係ではなくつながりがあることについて理解を深め、「つながり・現状・未来」という観点でこれらの問題を捉えることが大切なのだと再認識しました。その後、広島平和記念資料館の見学、そして学校の職員と多数の中学生が一瞬のうちに被爆し即死した広島二中原爆慰霊碑への参拝、被爆当時、爆心地から600mの中島本町で建物疎開作業に従事していた生徒と職員は本川河岸に整列して訓示中に被爆し、ほとんどが即死、その多くは遺骨の判別も、拾い集めもできない状況だったということです。静かに頭を垂れ、手を合わせました。

2日目は、平和記念式典に参加しました。この日広島は被爆から73年の「原爆の日」を迎えました。73年前、この日と同じ月曜日の朝、真夏の太陽が照りつけ、8時15分に目もくらむ一瞬の閃光、立ち昇ったきのこ雲の下で何の罪もない多くの命が奪われ、街は破壊尽くされました。「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものを作ってしまうのも人間です。」で始まった広島市の小学生2名からこども代表の「平和の誓い」が静かに響き、心を揺さぶりました。参加した生徒の胸の中で平和への思いや願いを新たにした瞬間でした。蝉の声と鐘の音だけが響く厳粛で時間が止まったような黙とうの時間、平和記念式典参加は、生徒一人一人にかけがえのない体験として一生心に残るものになったことでしょう。

その後は、船に乗ってもう一つの世界遺産である宮島へ出発しました。朱塗りの荘厳な厳島神社でも自分や家族、みんなの幸せ、更に世界恒久平和を願って手を合わせました。

また、今回初めて、中学校2年生の国語の教科書に「壁に残された伝言」として掲載されている「袋町小学校平和資料館」を見学させていただきました。

2日目の夜は、灯ろう流しに参加しました。毎年8月6日に原爆ドーム前を流れる元安川に灯ろうを流して、原爆、戦災、一般死没者のご冥福を祈るとともに、広く世界へ平和のメッセージを発信し、恒久平和を祈願する行事です。夜の元安川に静かに流れる色とりどりの灯ろうの幻想的な美しさに感動するとともに、生徒たちも思い思いに平和へのメッセージを書き込んだ自分の灯ろうを流し、手を合わせ、多くの戦没者への供養と平和への願いを祈ることができました。

3日目は、早朝より平和記念公園の「原爆の子の像」へ赴き、各中学校の生徒たちが協力して折った「千羽鶴」を心を込めて奉納しました。「原爆の子の像」は、被爆から10年後に白血病で亡くなった少女、佐々木禎子さんが大きく関わっており、年間を通じて、たくさんの千羽鶴が捧げられていることから、別称「千羽鶴の塔」とも呼ばれています。その頂上には折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像が立ち、平和な未来への夢を託しています。像の下に置かれた石碑には、「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」という碑文が刻まれています。鶴を折った下野市・壬生町の多くの中学生や下野市民の平和への心を捧げることができました。

最後になりましたが、平和記念式典のこども代表「平和の誓い」の中に「平和とは、自然と笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。・・・平和をつくることは、難しいことではありません。私たちは無力ではないのです。・・・私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。」という宣言がありました。この3日間で生徒たちは、目や耳や肌や心で学び感じた本物の体験を通して、原子爆弾の開発や原爆被害の実相（特質、建物の被害、熱線や爆風・高熱・放射線の被害、後障害）、更に核兵器や

グローバルな視点での戦争、紛争、飢餓、環境問題等の多くの問題に思いを馳せることができ、生徒たちにとってヒロシマが「平和を考え、平和を誓い、未来を考えるスタートの場所」になったことと思います。参加した生徒におかれましては、これらの学んだことや感じたことを、家族、友人、学校の生徒・先生、地域の方々、次の世代へと真理として語り伝える伝承者になってくれることを心より願っております。

結びになりますが、このような機会を与えてくださり、また企画・諸準備・当日の運営・引率などにご尽力を賜りました市当局の皆様、ご協力をいただきました保護者の皆様、学校関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。



広島に原爆が投下され73年が経ちました。一瞬にして、人々の暮らしや尊い命を奪い去り、広島は、悲しみと、原爆の犠牲になった人々の死体で溢れかえりました。

私は、8月5日から7日まで広島を訪れ、原爆の恐ろしさを身をもって感じることができました。現在、広島は、73年前、焼け野原になったとは思えないほど、高層ビルが立ち並び、木や花が悠々と生い茂り、被爆者が水を求め集まった元安川の水さえも穏やかに流れていました。しかし、今もまだ、被爆された方々の心には深い傷が残ったままなのです。

当時の広島について教えて下さった岡田さんは、8歳で被爆し、あの日、あの時のことを忘れることなく、今もまだ行方不明のお姉さんを探し続けているそうです。そんな悲惨な体験をしているからこそ、一つ一つの言葉に重みがありました。私は、岡田さんの講話で、印象に残っている言葉があります。「原爆が投下されたということを過去のものにしないで下さい。自分が体験したこと、感じたことを自分の言葉で伝えてほしい」と涙ながらも、力強く語って下さいました。この講話を聞き、私は、これから先、二度と戦争が起こることなく、みんなが安心して暮らせる、そんな世の中になってほしいと思いました。

人間は愚かな生き物です。なぜ広島でたくさんの方が犠牲になっているのにも関わらず核兵器がなくなるのか。核兵器を作ることで、明るい未来が築けると思ったのでしょうか。尊い命を犠牲にしてまで、核兵器を作り、明るい未来が築けるはずがありません。

現在、世界から核兵器をなくそうとする活動が行われ、少しずつ人々の考えが改められつつあります。しかし、一方で、今なお核兵器を作っている国もあります。私は、この世界に核兵器が存在する限り、「平和」は訪れないと思います。核兵器で平和を守るのではなく、核兵器がなくとも平和な世界になることを強く願います。

私は、実際に被爆された方から学んだこと、そして、昭和20年8月6日、午前8時15分に起きたことを風化させず、次世代に受け継がなければならない重大な使命があります。岡田さんも当時のことを何も知らず、再び同じことが繰り返されるのが一番怖いとおっしゃっていました。

広島は毎日、午前8時15分に平和の鐘が響き渡っています。8月6日の出来事を過去のものにすることなく、今こうして生活できることに感謝していきたいです。そして永遠に平和な世の中が永遠に続いてほしいです。過去の過ちを繰り返すことなく、原爆で亡くなられた方の想いを背負い、これから生活していこうと思います。本当に貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。

私が、「広島」という歴史ある地に足を踏み入れ、壁がぼろぼろになった原爆ドームを見たとき、73年前、この地にあの恐ろしい原爆が投下され、焼け野原となったことが目に浮かぶと、一瞬、言葉を失いました。そのたたく姿は、私達に何か訴えているのではないかと思います、平和な世界をつくらねばならないという強い気持ちが芽生えました。

被爆者の岡田さんの話を伺ったとき、平和な当たり前の生活のありがたさを感じました。原爆が投下されたとき、岡田さんは泣き叫んでいる人々を助けることができず、後悔しているそうです。私は、この貴重な話を後世に伝え、原爆の恐ろしさを絶対に風化させてはいけなないと思いました。

8月6日、平和記念式典には多くの参列者がいました。その中でも、外国の方が多く参列していたことに驚きました。外国の方も原爆の恐ろしさ、戦争の愚かさ、そして、平和の尊さを積極的に学ぼうとしていて、広島への思いが世界中に広まっていること感じました。8時15分。辺りは蝉の鳴く声と鐘の音だけになり、原爆で亡くなった方々へ黙禱を捧げました。

平和記念式典で特に印象に残っているのは、小学生による、平和への誓いでした。「苦しみや憎しみを乗り越え、平和な未来をつくろうと懸命に生きている広島の人々の思いをつなぎ、平和を築いていく。」という言葉に、心を打たれました。私達が平和への思いをつないでいかなければならないと強く感じました。

千羽鶴を奉納するときに、「もう二度と同じ過ちは繰り返さず、平和な世界になりますように。」と思いを込めました。

平和の鐘を鳴らし、その音が響いている間、平和への思いを、心から願いました。

「平和」この二文字を実現させるための誤った手段で、どれだけの人が苦しんでしょう。しかし、その苦しみを乗り越えてきたからこそ、今の当たり前の生活があります。世界では今なお、戦争をしている国や、核兵器を所持・製造している国があります。平和記念式典でもあったように、私達は無力ではありません。だからこそ、この貴重な経験を生かして、誰もが「平和」を理解し、平和な世界を築けるように、次の世代にも、そして、世界中に平和の尊さを伝えていきたいです。



広島に足を踏み入れ、初めて感じたことは広島の復興技術の凄さです。広島駅から出ると目の前には高くそびえ立つ建物、道路の真ん中を走る路面電車。この地に73年前、恐ろしい原子爆弾が落ちたとは思えませんでした。これほど素晴らしい地になるまで広島の人々がどれだけ努力してきたのか、それをこの景色が私に教えてくれているのだと思いました。

私が一番心に残ったことは被爆体験をされた方から聞いた講話です。当時、空襲の被害を少なくするため、子供は疎開していました。空襲警報が出されると「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣き叫ぶ子供が沢山いたそうです。その時の人々がどれだけ怖かったか、私は想像するだけで胸がいっぱいになりました。「たった一発の原子爆弾で広島は・・・」と涙ながらに当時の様子を語るその姿が私の心を大きく揺さ振りました。皮膚はただれぶら下がり、肉が見え、とても人とは思えない姿だったと言います。そして潰れた家の下から助けを求めている子供の声も聞こえたそうです。この話を聞き、何の罪もない多くの命が一瞬で奪われたのだと分かり言葉を失いました。核兵器はあってはならない恐ろしいものだと感じました。講話をしてくださった方が最後にこんな言葉を私たちにくださいました。「特別でなくていい。普通を守り続けることが平和なんだよ。」この言葉で、私が普段当たり前のよう過ごしている日常はありがたいことなのだと気づかされました。

8月6日。私たちは平和記念式典に参列しました。見上げるとそこには、雲ひとつない青い空が広がっていました。73年前のこの日も同じような空だったと聞きました。新たな1日が始まろうとするそのときに落とされた原子爆弾がもたらした恐怖は今も人々を苦しめています。戦争の悲惨さを改めて感じました。

原爆の子の像の前で手を合わせました。千羽鶴を奉納する時、既に沢山の鶴がありました。それは日本のものだけでなく、外国からのものもありました。数え切れないほどの鶴を見て、これだけの人が世界が平和になることを願っているのだと分かりました。「平和になってほしい」という思いが込められた鶴は美しいものだと思います。

私は、この派遣事業で多くのことを学びました。核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、命の大切さを直接、肌で感じることができました。この経験は私にとって大変貴重なものになりました。73年前の実状や被爆された方の思い、私が学び感じたことをたくさんの人々に伝えていきます。平和な日々がどれほどありがたいものなのか絶えず語り継いでいきたいと思います。それが私の使命です。私は世界が笑顔であふれ、平和が続くことを信じます。

最後に、この企画を進め、素晴らしい機会を与えてくださった市の職員の皆さんに感謝し、自分の使命を果たすことを誓います。

私たち平成30年度平和研修派遣団は8月の5、6、7日に広島へ行ってきました。幸い悪天候や酷暑に見舞われることもなく予定通りに活動することができました。

広島に着いて最初に向かったのは原爆ドームでした。近くで見た原爆ドームは迫力を感じましたが、今にも崩れてしまいそうでどれほどの威力があったのかを感じ取ることができました。

また、私たちは爆心地にも行きました。今、そこは病院になっていました。本当にそこが一面焼け野原になったとは信じられませんでした。

その後私たちは被爆者の岡田さんから当時の被爆体験談を伺うことができました。岡田さんの体験談は私たちが想像していたものよりもずっと悲惨なものでした。皮膚は垂れ下がり骨が見えている人もいて、まるで地獄のような光景だったそうです。

岡田さんの体験談からたった1発の原子爆弾がものすごい勢いで広島市内を地獄へと変えていったことが分かりました。多くの方が苦しみながら亡くなってしまい、今もまだ白血病やガンなどの後遺症に悩まされている人がたくさんいます。戦争は終わってから大変だと知りました。

平和記念資料館では、当時の服や変形した瓶、原子爆弾が爆発した時の様子を再現した映像などが展示されていました。再現映像では実際に見てみないと分からないこと、話からでは想像できないことを感じるすることができました。平穏な普通の日常がこうも簡単に壊されていくところを見て、やはり戦争はあってはいけないと強く感じました。

また平和記念式典では多くの方が参加をしていました。もちろん日本人も多くなりましたが、何より外国人の多さに世界各国が注目していることだと感じるすることができました。8時15分から1分間の黙とうがありました。たった1分でしたが私にはとても長く感じました。約70年前ここでどれだけの尊い命が失われたのか、どれだけ悲惨な状況だったのかを肌で感じました。

最後に今回見たり、聞いたり、感じたりしたことはとても貴重なものでした。それらを今度は自分なりの言葉にして家族や友人、学校や地域そして後世に伝えていきたいです。



今回平和派遣団として実際に広島に行き、73年前のあの日について学びました。

最初に訪れたのは、今もなお原爆の悲惨な光景が浮かぶような、歴史を物語った原爆ドームです。そこには、水を求め、火傷を負った人々が大勢亡くなられた元安川が広がっていました。きれいな街中に大きくそびえたつ原爆ドームと、側を流れる元安川からは、表現ができないほどの迫力と、戦争の苦しみや悲惨さを感じました。

その後、被爆者の方のお話を聞かせていただく中で、強く印象に残っていることがありました。それは、「今でも夕焼けの赤い空を見ると、ただただあの日の事を後悔している。」という言葉です。この方は、助けを求める性別のわからない人々を置いて行ってしまいとても後悔している、とおっしゃっていました。この言葉を聞き、何の罪もない人に、忘れられない後悔を背負わせた原爆は本当に残酷だと思いました。自分の住む街の人々が一瞬で別人になる恐怖と悲惨さは、言葉を失うほどの重いものです。なぜ、罪のない人が一生重いものを背負っていかなければならないのか、疑問と怒りを覚えました。

また、平和記念式典や灯ろう流しを体験させていただくことで、たくさんの人々の平和に対する強い願いや、亡くなられた方、被爆者の方への思いを感じ取ることができました。改めて「平和」という言葉の意味を考えさせられました。平和はただ争いが起こらないことではなく、人々の過ちや悲しい歴史を繰り返さないことだと感じました。そして、先人の知恵を良い方向に繋げていくことが、平和への第一歩になるのではないかと考えました。

最終日、平和記念公園では平和の鐘をならすことができました。核兵器を二度と使用させないように、1秒でもはやく平和な世界になるように、という強い願いを込めて精一杯力強くなりました。

この平和派遣研修を通し、73年前の広島を十分に学ぶことができました。また、1945年8月6日について深く考えさせられました。今回学んだことや被爆者の方のお話を忘れず、次世代に語り継いでいきます。核兵器をつくらない、もたない、もちこませないという非核三原則を守らせ、永久に戦争が起こらない世の中にしたいです。



広島に着いたとき、「こんなにきれいで活気あふれる街なのに、本当に原爆が投下されたのだろうか。」と思いました。しかし、今にも崩れ落ちそうな原爆ドームを見たたん、原子爆弾の爆風、熱線の強さを強烈に感じました。この瞬間、平和の尊さや生命の尊厳について考えずにはいられませんでした。当時、周辺にいた人々のことを考えると、どれほどの衝撃を受けたのかと恐ろしく思います。中学生平和研修派遣団としての3日間は、ここから始まりました。

被爆体験講話では、被爆者の岡田さんが、目の前で瓦礫につまずき、焼かれて亡くなっていく人を助けられなかったことがとても悔しかったと話されていました。また、真っ赤な夕日を見ると、あの日、広島を燃やした火のようで、当時のつらいことを思い出すともおっしゃっていました。原子爆弾は体だけでなく、人々の心にも大きな爪痕を残したのです。人々がその傷と一生闘わなくてはならなくなってしまうほどの強大な破壊力の前に、言葉もありませんでした。

平和記念資料館では、核兵器の危険性や、戦後の広島の歩みを学びました。荒れ果てた広島の写真や、ボロボロになった衣服などの展示物を見学し、原爆の恐ろしさだけでなく、復興しようという人々の強い気持ちや団結力も感じました。

2日目の平和記念式典では、早朝にも関わらずたくさんの方が出席していて、子どもや大人、外国人まで多くの人たちの原爆や平和への関心の高さを感じました。

元安棧橋での灯籠流し体験では、水を求めて川に飛び込み亡くなっていった人々の冥福を祈り、灯籠を流しました。水を求め川に飛び込み亡くなっていく人々を想像すると、とても心が痛みました。

私の曾祖母も、東京大空襲で母と妹を川で亡くしています。自分に繋がる人が実際に戦争の被害者でもあり、改めて戦争は二度と起こしてはならないと強く思いました。

73年間で広島がここまで復興したのはなぜなのかという当初の疑問は、町の人々が一生懸命努力し、協力した結果だと、この3日間の体験で感じとることができました。原爆や戦争の恐ろしさなどの人間の悪い側面だけでなく、助け合いや協力する力など、人間の良い部分やそれによって守られている平和の尊さも伝えていきたいと思います。そしてこの経験を生かし、少しでも世界が平和になるように努力していきたいと思います。



私がこの3日間を通して改めて戦争や原爆の怖さを知るとともに、原爆にあった方々の平和への強い思いを感じさせられました

まず1日目、原爆ドームを間近で見た時は驚きました。こんなに大きくて立派な建物が一瞬でこんなにぼろぼろになってしまうなんて、原爆ドームから元の形を想像することはできませんでした。またその横を流れる元安川はとても広く長い川でした。この大きな川が当時、遺体で埋まったのかと思うと原子爆弾一つがこんなにたくさんの人の命を奪い、苦しめたということが伝わってきてとてもぞっとしました。被爆者体験講話会では、被爆者の方が話して下さった事実が信じられませんでした。倒れた状態のまま火に包まれた人、全身火傷を負い、もがき苦しむ人、それを目の辺りにした被爆者の方、彼女のお姉さんは未だに骨も見つからないのだそうです。今の緑が溢れる平和な広島しか知らない私には想像することすらできず、言葉も出ませんでした。被爆者の方が「思い出したくない」と涙を流しながらも私たちに話して下さり原爆、戦争の怖さを思い知りました。

2日目の平和記念式典では、この式典特別の雰囲気を感じる事ができました。世界中からたくさんの人々が参列し、代表の方々の言葉はとても心に響きました。その場にいる全員が平和を心から願える雰囲気を作り出せることにすごいと思い、またそれは被爆した方々が平和を願い、思いを行動にしてくれたからだと思います。私も心から平和を願う事ができました。またその夜、行われた灯ろう流しは式典のような雰囲気ではありませんでしたが、色彩々の灯ろうが、あの大きな元安川一面に流れていく姿は、当時その元安川で水を求めなくなった方々のことを知り、そして世界中の人々に知ってもらおうという気持ちにさせてくれました。灯ろう流しで感じたこの思いは絶対に忘れてはならない。そして私達の世代が世界中の人々に伝えていくべきだと思いました。

3日目に訪れた「原爆の子の像」を見た時、私はその像が平和を見守っている感じがしました。折り鶴の少女、佐々木禎子さんをモデルとした像の一番上に立つ少女はまっすぐ前を見つめていました。その姿は戦争の怖さを世界中に訴えかけているようでもあり、世界中の平和を祈っているようでもありました。禎子さんのような何も罪のない人々の命を奪った戦争を二度と起こしてはいけないという思いがさらに強まりました。

私が3日間で感じた戦争や原爆に対する怖さというのは、資料館などで展示してある痛々しい物からだけでなく、被爆者の方や像、いろいろな慰霊碑などからも感じる事ができました。それはまるでどこがどれ程の被害を受けたなどではなく、広島市全体が戦争の恐ろしさを平和の大切さを語っているようでした。これらの思いを、まずは身近な人からそして世界中の人々に伝えていきたいです。

私は8月5日からの3日間広島を訪れました。最初に感じたこと、それは街の復興力です。街には多くの高層ビルが建ち並び、きれいに整備された道路には路面電車が走っていました。73年前、この地が焼け野原になっていたとは考えられませんでした。

最初に訪れた原爆ドーム。想像していたよりも破壊された箇所が多く、原子爆弾の威力、恐ろしさを物語っていました。実際に前に立つと重たく独特な雰囲気を感じました。近くを流れる元安川。原爆投下直後、熱さから逃れるために、多くの人々が飛び込み、無数の死体で埋め尽くされていました。死体が横たわっていたと思われる場所に立つと何とも言えない複雑な気持ちになりました。

次に被爆体験を聞きに行きました。講話をしてくださった岡田さんは八歳のときに爆心地から2.8キロメートル離れた自宅で被爆されたそうです。岡田さんは、「自分の目の前で人が死んでいくのを見た。何もできなかった。今でも夕焼けの真っ赤な空を見るとあの日のことを思い出す。」

と、嗚咽を漏らしながら語っていました。何の罪のない人々を苦しめた原爆は本当に残酷な兵器だと思いました。講話の中で岡田さんは私たちに、

「賢い大人になれ。」

と、繰り返していました。私は常に何が正しいのかを見極めて行動し、戦争のない平和な世界をつかって欲しいという、岡田さんの願いだと思いました。

その後平和記念公園と資料館に訪れました。平和記念公園は原爆投下後初の広島市長、浜井信三氏が広島を世界平和の中心とすべく建設しました。資料館には当時の被爆を表したCGや写真などいくつもの資料が展示されていました。

2日目の平和記念式典はとても心に残りました。会場の厳粛な雰囲気を味わい、遠くからでしたが、式典の様子を見ることができました。式典中の「平和への誓い」はとても心に響きました。

3日間の中では、目を覆いたくなったり、耳を塞ぎたくなったりするようないくつかの経験がありました。しかし、それらは過去に起きた事実であり歴史です。このことを受け止めて生活しなければならないと思いました。

近年、被爆者の平均年齢が80歳を超え、戦争を体験していない人が多数います。勿論、普通に考えれば良い事ですが、戦争への関心は失われる一方です。そうならないためにも今回の研修で学んだ事を次の世代に語り継いでいきたいです。

最後に、今回このような機会を設けていただいた市の職員の皆様には心から感謝申し上げます。